Alfred de VIGNY 生誕二百年記念行事
Colloque «Alfred de VIGNY, connu, méconnu, inconnu» に参加して

田 中 隆 二

1. Etude de Vigny au Japon
2. Alfred de Vigny, connu, méconnu, inconnu (Colloque du bicentenaire de sa naissance)
3. 1998 年度アルフレッド・ド・ヴィニ生誕二百年記念行事
4. 現在の Association des amis d'Alfred de Vigny
5. Messieurs René Pomeau et Max Milner
6. Prix Alfred de Vigny
7.«Le sentiment de l'honneur chez Alfred de Vigny»
8. 恩師 François Germain 先生
9. Madame Christiane Lefranc 事務局長（現会長），P.-G. Castex 先生
10.アルフレッド・ド・ヴィニ没後百年記念誌 R.H.L.F.(ヴィニ，ルナン合併号)
11. Mademoiselle Françoise Lantz と恩師中村義男先生
12.«L'optimisme créateur d'Alfred de Vigny»

昨年十一月末，日本フランス語・フランス文学会・中国四国支部学会が，広島修道大学で催された際，未だ帰国して日も浅く，一種の興奮状態が続いていたのでしょうか，何か特別に立派な事でもしてきたかのような錯覚に陥り，シンポジウム参加の報告をさせて頂くよう申し出たのは，実は私の方からでございました。

しかし，その後既に半年以上経過し，その間に日本佛学史学会の全国大会を初めて広島で開き，そのお世話を買って出たりしましたのと，私事で恐縮ながら，次男の結婚式がつい先日とり行なわれたりしましたので，誠に申し訳ございませんが，昨年末とは打って変わり，今はすっかり熱が冷め，一体何故この報告のお願いをし，しかも，本日だけでなく，秋の支部学会でもお話させて頂くことにしてしまったのだろうと，実は大いに後悔しているところでございます。

もっとも，私の目的の一つは，実にはっきり致して居ります。それは「ヴィニ協会」Association des amis d'Alfred de VIGNY の機関誌をできるだけ多くの方に，こうした機会に宣伝させて頂くということです。お手許にお配り致しました紙片の一番下に記してありますのが，Association の会計係 Sabourin 女史の住所等でございます。大学図書館でも先生方の個人研究室でも，どちらでも結構です。予約購読をお願いできれば大変喜びます。宜しくお願い申し上げます。

これがありますので，支部学会での報告もお願いしたわけです。従って，秋にもまた同じお願いを繰り返すことになりますが，ご容赦下さい。あとはできるだけ同じ話にはしたくないのですが，話の源は一つなので，そう上手く違う話にはできません。順序を少し変えるぐらいが，関の

山です。本日の順序は終わりの方 No.12 から始めさせて頂きます。本日もし終わりまで行けませんでしたら，次回にご期待下さい。今日できなかった部分を，秋の支部学会では，重点的にお話したいと存じます。そのようにして，同じことを二度聞かされたというお叱りを予防できればと念願する次第です。

さて，前置きは未だ続きます。私がヴィニに関心を寄せ始めたのは，私の広島大学文学部文学科三年生の頃に遡ります。当時私はアナトール・フランスの作品を翻訳で盛んに読んで居りました。この作家の書いた物の中に Alfred de VIGNY という「ヴィニ論」がありました。それは，翻訳がなかったので，やむを得ず，原文で読みました。この本を読んだ事と，殆どどのフランス文学史にも，「ヴィニはフランス・ロマン派の中の殆ど唯一の哲学詩人」とあるのに，常にユゴーの後塵を拝している事実に何かひっかかるものを感じたこと，この二つが私のその後に非常な影響を及ぼしました。

その頃，一年後輩の仏文専攻生坂田君の自殺も影響がありました。私は全く死にたくなかったので，「人生とは何ぞや」とか，「人生如何にいきるべきか」とかという問いに対する答えを探し，それ等をヴィニの書いた物の中に求めるようになったのです。

No.12 の«L'optimisme créateur d'Alfred de VIGNY» とは，私の卒論の題でして，Pierre Moreau の同名の書から無断借用したものです。卒論発表会の時三木先生から「オプティミスムは述べてあるが，クレアトゥールの部分が無い」と評されたように，私にはそれは少しも分かって居りませんでした。今でも，頼りないものですが，この年になってやっと分かりかけたような気がして居ります。

ところで，学生の頃はヴィニの記念祭については何も知らなかったし，そういうことを主催する団体のある事にも考えが及びませんでした。Association des amis d'Alfred de VIGNY なる存在を知ったのは，恩師中村義男先生の推挙により，昭和 40(1965)年に母校広島大学文学部フランス文学教室の助手に採用されて以後の話です。当該教室の二代目外国人教師 Françoise Lantz 先生が親切にも，P.-G. Castex 氏が「Association」と関係有ることを私に教えて下さり，同氏の住所を知らせて下さったので，「Association」と私の触れ合いが始まりました。幸運にも Castex 氏は当時「Association」の副会長だったので，同氏より現会長(当時は事務局長)の Madame Lefranc を紹介して頂いたのでした。

ヴィニの没後百年祭はこれより前 1963 年に祝われて居り，その模様は「Association」機関誌及び R.H.L.F.の 1964 年号で知ることができます。

私は 1967 年渡仏しましたので，Madame Lefranc, Castex 教授にはその年の冬会って居ります。Germain 教授には Madame Lefranc の紹介で，やはり，この年会い，指導教授になって貰うことが決まりました。

私は，昭和 46(1971)年，岡山理科大学に採用，翌年 1972 年，フランス政府給費生として再渡仏，Germain 教授の指導の下，Dijon 大学で，ヴィニに関する学位論文を準備することとなりました。No.7 は私が同大学に提出した学位論文の題目です。1975 年 Alfred de VIGNY 賞が「Association」によって新設され，私はこの学位論文により，その第一回研究賞を受賞しました。

さて，本題のヴィニ生誕二百年祭の記念行事の一つであるシンポジウムのことですが，これは当初「ヴィニの若き後世」という題でした。*L'Esprit pur* というヴィニの詩篇に見いだされる語句から選ばれたものです。私は「日本に於けるアルフレッド・ド・ヴィニ研究」という題で発表の準備をしました。

昨年 1997 年は，三月から，生誕二百年祭のため，「Association」によっていろいろな催物が計画されて居りました。私は，可能ならば暑中休暇を利用して渡仏し，できるだけ多くの催物に参加したいと思って居りました。

しかし，七，八，九月にはめぼしい催物は何もなく，しかも，所属の広島市立大学の方針が変更になり，海外出張は学会で発表する場合しか認められないこととなりました。それで，十一月二十二日開催予定のこのシンポジウム参加しかヴィニ生誕二百年祭の渡仏は不可能となりました。シンポジウム後に参加できる行事が他にあれば，十二月十日ぐらいまでフランスに滞在したかったのですが，生憎それもなかったので，前後僅か 11 日で帰国しました。本当にシンポジウム出席の為だけの渡仏で，これまでで最も短い海外旅行となりました。

けれども，この海外出張は，近頃流行の表現を用いると，実行したのは正に「正解」だったようです。シンポジウムの前日・十一月二十一日，シンポジウムの主催者の一つである「フランス文学史学会」の総会が開かれ，その昼食会に私共夫婦も招待されましたが，その総会の席で Max Milner 氏の姿を見かけました。また，総会の議長と翌日シンポジウムの総司会を務めたのは René Pomeau 氏でした。Milner 氏は，1975 年 Dijon 大学で私が学位審査を受けた時の審査委員長でした。Pomeau 氏は，1978 年来日の時，岡山でお会いし，その時，氏と Catala 氏共編のヴィニの領地管理人宛書簡をまとめた本に署名と献辞を頂いていたのです。

Milner 氏は，私が傍に行って挨拶し，氏の主催する審査会で学位を得た者であることを告げるとすぐ想い出して下さり，翌日シンポジウムで発表する旨申し上げると，二十二日にまた来て下さるとのことで，実際，当日わざわざ来聴して下さいました。Pomeau 氏も想い出して，再会を喜んで下さいました。恩師 Germain 先生は 1994 年に亡くなられましたが，先生の代わりにこの両先生が私を待っていて下さったような気がしました。

シンポジウムでの私の順番は最後でした。日本流だと所謂「トリ」の地位です。もっとも，そんなものがフランスにも在るかどうか知りません。東洋人は私だけで，私の前はイタリア人，それ以外はフランス人だったと思われるので，フランスから最も遠いというのが最後の発表となった理由とも考えられます。

もっとも，私の発表の後，聴衆の中にいた Madame Lefranc が特に発言を求め，私が第一回ヴィニ研究賞受賞者であること，熱心なヴィニ愛好者であって，来仏の度にヴィニの墓に詣でる忠実な会員であることなど紹介して下さったのだから，全く意味の無い順番でもなかったのかも知れません。兎に角私はルフラン会長のお蔭で面目を施し，シンポジウム参加は私にとっては誠に「正解」でありました。

私は「日本に於けるヴィニ研究」について述べました。これは辰野隆先生の東大の卒業論文に始まります。しかし，その論文については題が知られているだけで，内容は知られて居りません。

実物は失われています。平岡昇先生も東大の卒業論文はヴィニについてでした。これは幸運にも先生の著書『プロポ I』に収録されているので読むことができます。また，杉捷夫先生の回想文により，辰野隆先生の東大の講義のお蔭で，わが国に於ける初期のフランス文学研究者はヴィニほか，フランス・ロマン派の作家についてはかなりよく知っていたらしいことが分かります。だが，辰野隆はボードレール，平岡昇はルソーというように，日本に於けるフランス文学研究の開拓者達は他の作家研究に対象を変更したので，その後ヴィニ研究はそれほど進展しませんでした。

戦後 1945 年以降の研究は『フランス語・フランス文学研究文献要覧』を見れば分かりますが，戦前はこの種のものがないので，殆ど知る方法がありません。戦前のヴィニ研究については，この他，九州大学教授・成瀬正一先生の講義録等を教え子が先生の没後編纂した『フランス文学講義』といったものが存在します。従って辰野隆先生以外でもヴィニについて啓発するものが存在したことは想像可能です。しかし，当時，京大ほか早稲田大，慶応大などでも似たようなことが行なわれたかもしれないが，証拠となるものの存在を知らないので，全く分かりません。

ヴィニの作品の翻訳は早くも 1920 年代に出版されています。小林龍雄氏が『チヤッタートン』も『詩人の日記』も 1924 年に世に問うています。平岡先生も『ステロ』を翻訳されて居り，戦前既に出版されています。1945 年以前のことは殆ど不明ですが，ヴィニは案外よく知られていたのかもしれません。

戦後は，先に述べた通りで，『文献要覧』によってかなり詳しく様子を知ることができます。大塚幸男，松下和則といった先生方が登場して参ります。それより若いところでは，私とか向井邦夫氏などが所謂ヴイニ研究者になるでしょうか。論文を複数発表している人は少ないです。

1971 年，大塚幸男先生が『アルフレッド・ド・ヴィニ　生涯と作品』を出版されました。私は『アルフレッド・ド・ヴィニー研究—その名誉の感情の変遷—』を 1979 年に上梓しました。同年，私は出身校・宇和島南高等学校創立八十周年記念行事で「海に瓶を投げよ」と題して記念講演を行ないました。そして，この詩の作者アルフレッド・ド・ヴィニを紹介し，「海に瓶を投げよ」という詩を解説し，先人より我々が受け継いだ学問・知識・諸々の伝統等の重要なものを後世に受け渡すという我々の義務について話しました。

当時は私の考えも未だその程度でしたが，その後，「ご恩返し」をするというのが，私の課題となってまいりました。シンポジウム参加はその絶好の機会と思われました。

想い返してみますと，私もいろいろな人にお世話になって居ります。とりわけフランス政府と「Association」には多大な恩恵を受けています。私は「ヴィニ研究」で四十年あまりを過ごして参りました。ヴィニ生誕二百年の記念行事に参加することは，繰り返しますが，フランスとヴィニ及び「Association」への「ご恩返し」の私にとっておそらく最初で最後の好機であると思われます。ヴィニ没後百五十年は 2013 年に来ますが，その記念行事に私が参加できるかどうかは，全く心もとないからです。

そんなわけで，シンポジウムでも，「ご恩返し」の話は一寸してみましたが，フランス人の聴衆に分かってもらえたかどうかについては，自信がありません。

私は，発表の終わりの方で，*L'Esprit pur* というヴィニの詩について，少しふれました。何故ならば，この詩は，私の解釈によれば，ヴィニ自身の，彼の先祖に対する「ご恩返し」の詩だからです。もっとも，ヴィニは自分が大詩人になったのは先祖のお蔭だとは言って居りません。反対に，先祖の名が人々の記憶に残るのは，子孫である自分が偉大な詩人になったからだと言って居ります。それはその通りです。しかし，表現は逆ですが，私はこの詩はやはりヴィニ流の「ご恩返し」の詩だと思います。先祖がいなければヴィニが存在した筈がないのですから。ただヴィニはあからさまにそう言わなかっただけのことで，この詩を書いた彼の気持ちは，すべての先人への感謝の念であったと想像されます。

私が「ご恩返し」について述べる機会は沢山あります。学生相手に話す時は，わざと，「お礼参り」はやくざのすること，「微笑み返し」はキャンディーズの歌った曲の題というのを付け加えています。そうでないと，「ご恩返し」という考えは如何にも古くさくて，もう今の若い人には全く無縁のもののように思われ，この美徳は顧みられないのではないかと危惧されますし，言っている私自身も照れ臭いこと夥しいからです。恩師の中村先生だと，私がこんなことを言うのを聞かれたら，「君，君のはご恩返しでなくて，五円返しじゃないかい」と言われそうです。先生から受けたご恩からすれば，本当は「五円返し」にもならないかもしれません。せめて「しっぺ返し」にはならないように気をつけたいものです。それにしても恩師中村義男先生もフランス人の恩師 Germain 先生も他のお世話になった方も，殆どの方が既にこの世になく，この人達に直接「ご恩を返す」ことは，もう全く不可能となってしまいました。せめて，「ご恩返し」ができるような人になって下さいと，私よりも若い人に私が言うことぐらいが，「ご恩返し」の真似事ぐらいです。あとは自分のできることを，兎に角，一生懸命実行することでしょうか。「馬鹿の一つ覚え」のように。

ご静聴有り難うございました。

SOCIÉTÉ D'HISTOIRE LITTÉRAIRE DE LA FRANCE

reconnu d'utilité publique

112, rue Monge--75005 Paris

ALFRED DE VIGNY, CONNU, MÉCONNU, INCONNU

Colloque du bicentenaire de sa naissance

Samedi 22 novembre 1997

En Sorbonne--salle Louis Liard

17, rue de la sorbonne--75005 PARIS

9h15--Ouverture du colloque par le Président René POMEAU de l'Institut

De 9h30 à 12h30--Séance présidée par Madeleine AMBRIÈRE

André JARRY

La femme dans l'œuvre de Vigny

Ales POHORSKY

Vigny et la problématique du poète maudit

Jean-Yves MOLLIER

Vigny et la propriété littéraire

Sophie MARCHAL

Salon et clientélisme littéraires au XIXe siècle : le cas Vigny

Loïc CHOTARD

Vigny lecteur de Corneille

Gabrielle CHAMARAT

Le Christ aux Oliviers. Vigny et Nerval

De 14h30 à 18h---Séance présidée par Loïc CHOTARD

Paul BÉNICHOU

Un Gethsémani romantique

Lise SABOURIN

La mission de l'homme de lettres selon Vigny

Jacques-Philippe SAINT-GÉRAND

Vigny, l'amour et le dessein de la langue

Joseph-Marc BAILBÉ

Vigny et l'orchestre intérieur : poésie et musique

Emilio SALA

Vigny inspirateur de l'opéra romantique italien

Ryûji TANAKA

Vigny au Japon

Prix Alfred de VIGNY

26 juin 1975	Prix de Poésie à Yannis Ritos
	Prix d'Etude à Ryuji Tanaka
11 juillet 1977	Prix de Poésie à Marcel Thiry
27 avril 1979	Prix de Poésie à Ionna Tsatsou
23 janvier 1980	Prix de Poésie à Robert Mallet
	Prix d'Etude à Anne Strabian de Fabry
13 janvier 1981	Prix de Poésie à Léopold Sédar Senghor
	Prix d'Etude à Jacques-Philippe Saint-Gérand

25 janvier 1982	Prix de Poésie à Pierre Emmanuel
	Prix d'Etude à Yolande Legrand
13 juin 1983	Prix de Poésie à Jean-Louis Vallas
	Prix d'Etude à Michel Cambien
19 janvier 1984	Prix de Poésie à Michel de Saint-Pierre
14 janvier 1985	Prix de Poésie à Louis Amade
30 juin 1986	Prix de Poésie à Pierre Seghers
25 septembre 1987	Prix de Poésie à Kenneth White
14 octobre 1988	Prix de Poésie à Vladimir Volkoff
	Prix d'Etude à Paul Bénichou
2 octobre 1989	Prix d'Etude à Christian de Bartillat
14 mai 1990	Prix de Poésie (1989) à Marie-Claire Bancquart
	Prix de Poésie (1990) à Louis Pauwels
	Prix d'Etude à Madeleine Ambrière
29 octobre 1991	Prix d'Etude à Nicole Casanova
22 septembre 1992	Prix de Poésie à Jean Raspail
	Prix d'Etude à Philippe Vigier
25 janvier 1994	Prix de Poésie à Jean Rousselot
	Prix d'Etude à Grancis Ambrière
17 mai 1995	Prix de Poésie (1994) à Pierre de Boisdeffre
	Prix de Poésie (1995) à Pierre Béarn

Participation au colloque «Alfred de VIGNY, connu, méconnu, inconnu» Pour la commémoration du bicentenaire de la naissance du poète

Ryûji TANAKA

Les connaissances présentées ici sur les études d'Alfred de VIGNY au Japon sont fondées sur une collection bibliographique inaugurée en 1978, intitulée *Répertoire des documents sur les études de langue et de littérature françaises* ayant vu le jour dans ce domaine depuis 1945. Il est à mentionner qu'il n'existe rien de semblable pour la période antérieure à cette date.

Cependant, on peut ajouter ici quelques informations sur la longue période qui précède. Ainsi, les études sur Alfred de VIGNY au Japon ont été inaugurées par Yutaka Tatsuno, un grand spécialiste de la littérature française au Japon, professeur à l'Université impériale de Tokyo. Cette entreprise a été poursuivie par un des élèves de Tatsuno, Noboru Hiraoka, qui a notamment consacré à VIGNY son mémoire de fin d'études à la même université. Shôichi Naruse, professeur à l'Université impériale de Kyûshu, avait présenté de son côté «VIGNY et son œuvre» en 1925, dans un cours sur le romantisme en France.

Les informations sont plus précises à partir de la période de l'après-guerre, grâce à l'existence du répertoire mentionné plus haut. Ainsi, parmi les spécialistes et les traducteurs les plus connus qui se sont consacré à VIGNY, on peut citer Kazunori Matsushita, Noboru Hiraoka et Yukio Otsuka.

Cependant, Matsushita est à la retraite et Hiraoka et Otsuka sont décédés, ce qui donne actuellement une période «creuse». Nous sommes à une époque où les jeunes Japonais passent le plus claire de leur temps à lire des bandes dessinées, et il est difficile de les intéresser à des œuvres littéraires et, en particulier, à celles de VIGNY.

Les francisants japonais se doivent de faire tout leur possible pour le regain de popularité des œuvres de VIGNY au Japon, pour se montrer dignes du legs que VIGNY a fait à la postérité ; ils doivent payer leur dette envers *l'Esprit pur.*